

灤州影系冀東地区について—中国影戲研究

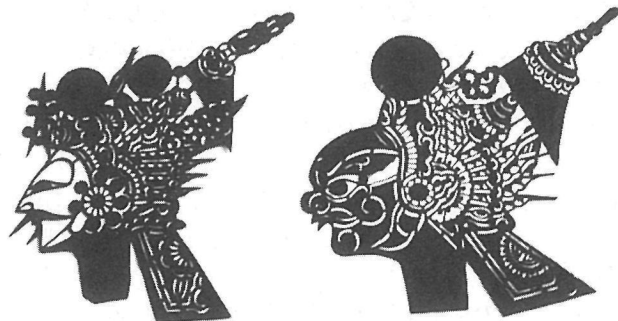
稲葉明子

1. 分布地区概観

河北省東部（冀東）から東北三省にかけて、灤州影、樂亭影、また唐山影とも呼ばれる影戲が分布する。（附、地図参照）共通する特徴は、驢馬の皮を用い、額から鼻にかけて凹凸をつけない「通天鼻」という人形の顔立ち、脚本を見ながら演じる上演形態のほか、歌詞の韻律構造が詩讀系の齊言句の他に「三頂七」や「三趕七」と呼ばれる独特の形態をもつ点である。江玉祥教授の区分では灤州影系⁽¹⁾といい、冀東皮影戲⁽²⁾、北京東城派⁽³⁾、東北皮影戲⁽⁴⁾をこれに含める。本稿では、このうち冀東地区部分を中心に考察する。印南1944でいう北京東城派とは北京城内のみをいうものではなく、事実上本稿が扱う灤州影系全体についての記述である。

「冀東地区」とは、天津から東、現在の唐山市、秦皇島市に属する各県を指し、遼のころ灤州が置かれた。万里の長城の起点である山海関を超えれば遼寧省で、河北側を関内、遼寧省側を関外という。歴史を振り返れば、北京が漢民族王朝の支配地に属したのは最近では明代以降のことで、灤州は従来辺縁の地であった。北宋時代は遼に、異民族王朝が南下した南宋、元はもちろんそれらの支配に属した。明代は漢土となるも、万里の長城付近まで女真部や韃靼が迫り、現在の盧龍に「永平府」がおかれた。この盧龍・灤県・昌黎、万里の長城沿いに内陸に行けば遷安・豊潤・遵化・玉田といった地名が古くよりみられる。特に、遵化は東北地方との陸路の交易の中心で、そこから玉田・天津と物資が流通したようである。⁽⁵⁾清代に影戲で有名になる樂亭は、三国魏のころより樂安亭、樂安鎮という名で呼ばれ、代々灤州にあたる行政区域に属してきた。明の建文二（1400）年、遼東兵の進攻にあい廃墟と化した⁽⁶⁾が、永樂元（1403）年に江蘇・安徽の富戸、山西の平民を屯田させた地区であるという。

灤州影系の特徴を持つ影戲は、灤州影、樂亭影、また唐山影と呼ばれることもある。最後の唐山影という言い方は、二十世紀初頭より鉅業により発展を遂げた唐山が徐々に周辺の経済・文化の中心となり、かつての灤州が現在は唐山地区と呼ばれるようになったことによる。樂亭影という言い方は、清代から民国初期にかけて、特に樂亭県を中心に多数の「影班」「影戲箱」⁽⁷⁾（影戲劇団のこと）が活発に活動し、周辺地域に名を馳せたことによる。樂亭県を含む冀東地区を古くは灤州と言ったことから、灤州影とは即ち樂亭影の別名だとする見方と、樂亭影に先だって系統の異なる灤州影が分布していた可能性を指摘する見方とがあり、にわかには結論づけられない。



灤州影系蓋州影影人（遼寧省張永夫氏蔵）

更に、この地域にあって、灤州影系以外に異なる系統が存在していた痕跡もある。二十世紀初頭まで、冀東の遷安・遷西・撫寧のあたりには、灤州影の他に、比較的大きな人形を用いる「福影（府影ともいう）」⁽⁸⁾が分布していた。また、遼寧省でも灤州影系の特徴をもつ驢皮影が盛んであるが、南部の「遼南影」⁽⁹⁾はやはりかつて灤州影系とは異なる独特の唱腔をもっていたという。これらの問題は、稿を改めて考察したい。

本稿では、先行研究と筆者による現地調査結果をもとに、この地区の影戲についてその系統と分布を考察し、灤州影系の把握を試みたい。⁽¹⁰⁾

2. 先行研究

民国二十三（1934）年に顧頡剛が「灤州影戲」を発表したのを皮切りに、学界で幾つかの論考がなされた。⁽¹¹⁾京劇のような都市の芸能と違い、このような芸能の存在を皆が身近に知っていても、芸風や分布についてきちんと把握しようという方向にはいかない、そんな民間の芸能である。民国時代の文筆に携わる人々には、自ずと限界があった。当時重要なのは、むしろ外国人の視点である。民国時代に中国各地を見聞した欧米人の著録や収集資料は、現在貴重な資料になっているし、顧頡剛論文で挙げる李脱塵という人物は、天主教の布教に携わる人物だった。⁽¹²⁾また、早稲田大学演劇博物館館員として昭和十三年（1938年）に旧満州から北京・江南にかけて調査を行った印南高一は、時の見聞と資料を昭和十九（1944）年『支那の影絵芝居』にまとめている。昭和二十九（1954）年に「灤州影戲の藝術」を発表した澤田瑞穂も、民国時代の北京での体験から独自の切り口で「影戲」の本質に鋭く迫っている。民国時代の見聞はいずれも行動範囲が限られ、影戲のより広い分布を見渡すことはできていないとはいえ、貴重な情報を提供してくれる。⁽¹³⁾

灤州影系を知るための有力な資料として、次に、樂亭・唐山など、現地の報告がある。樂亭で芸を学び民国時代

東北に逃れた劉慶豊『皮影史料』、楽亭の文芸工作者魏革新の『楽亭皮影』、唐山の劉鋭華らによる『唐山戯曲資料匯編』第三集冀東皮影專輯など、いずれも内部資料であるが、芸人の芸と生き様を現地で克明に取材し記録したものである。

解放初期、民衆芸能は国家に保護されたともいえるが、ある意味で農村本来の存続形態に変更がなされた。そこに、加えて幾度かの曲折があった。文化大革命を経て八十年代にはどの地区も農村の芸能が復活の兆しをみせた。そのころ全国の影戯を調査したのが四川大学の江玉祥教授である。解放後の各地の研究などは、江玉祥1992年らびに1999年に網羅されている。また、『楽亭大鼓』の口承文化としての様態をダイナミックに示した井口1999は、まさに本稿が扱う冀東地区の楽亭・灤県・灤南県について影戯を含めてフィールドワークを行い、八十年代以降の当地の様子を生き活きと描き出している。

九十年代になって、それまで市場に出にくかった「影巻」が大量に出回る時期があった。これを反映して岡崎2001・落合2002・2003によりそのリストが紹介されている。岡崎2001所収の千田2001は、北京影戯と灤州影系について新たな視点を提供する。また、歴代地方志を受け継ぐ各地地方志も、民国に継いで「解放後」版が九十年代に多く出版された。民国版までは存在に気づかれなかったり、陋習として無視されてきた影戯も、かえってこの「解放後」版には記載されている。

こうした先行研究から、灤州影系の把握を試みたい。

まずは冀東地区現地研究者による実際の芸人の調査を積み重ねた二つの詳細な報告、魏革新『楽亭皮影』、と劉鋭華「冀東皮影史探討與論述」を中心⁽¹⁴⁾に、清朝以来の冀東地区についてまとめた。

a. 清代の灤州影—楽亭影の発達

(1) 影班と後ろ盾

楽亭影は、清代から民国初年にかけて大変栄えた。初期の有名なものは、「楊寡婦班」である。その祖先には乾隆年間⁽¹⁵⁾の「武舉」で「侍衛」を務めた楊徳潤、雍正(1736)年進士楊開基がおり、家運の発展に伴いお抱えの影班をもつようになったという。咸豊から光緒にかけて、楽亭では「崔劉張史」の四大名家がレベルの高い影班をもつことで有名だった。廟上荘の崔家「聚成堂影班」、汀流河劉石各荘の劉輔卿「慶和堂影班」、小黑坨の張攻璞「張攻爺影班」、大港の史康侯「翠蔭堂影班」である。崔家の原籍は吉林省長白山崔家溝で、明朝末年に満州の軍旅に入り、1644年に清に従い入関したものである。光緒年間に永平府知府遊知開が影戯を禁じると、当時の班主崔右文、字子宣(1854-1902)は、芸人の訴えに応じて知府に赴き影戯を上演、禁令を撤回させたという⁽¹⁵⁾。崔家の影班は二十世紀半ばまで「崔家大班」として灤州影で最も権威のある班として影響力をもった。劉輔卿は商売で財を成し、影班を持つにいたった。このほか葛翰林(葛

毓芝字養田)影班・常孚芝陰班・李國鼎影班・張澤國影班・安美影班・王華影班・龍老玉影班・松茂堂影班、慶豊堂影班など清末民初までに楽亭県の影班は四十以上を数え、最も栄えた。これら楽亭の影班の多くが、七七事変(盧溝橋事件)の政情不安と1938年に楽亭を襲った洪水の影響で活動を停止する。

このように、役人を務めるにしる商売で財を成すにしろ、家が栄えると影班をもつようである。例えば、楽亭県城でレストランと高級旅館を営んでいた張澤國は、母の誕生日に崔家大班を呼んだが、先約が入っていると断られたため自前で張澤國班を作ることにし、当地の名優を招いて組織したという。各影班はオーナーの家の慶事に上演を行い、普段は外の求めに応じて出張して上演活動を行った。

(2) 芸人の様子

影班の競争は激しく、近くで同時に上演して観客の評価を問う「打対台」ということも行われた。芸人の間でも、厳しい修行と競争、そして相次ぐ芸風の革新が行われた。主な影班は「子弟班」をもって後身の育成にあたり、弟子をとるときには「河や井戸に身を投げて、打ち殺されても文句なし⁽¹⁶⁾」と覚書を交わしたという。例えば、小旦で有名な李雲権が学び始めのころ、師匠は撥で打ちながら教え、李は泣きながら唱を覚えたため、人々は「可憐件兒」と呼んだ。後に名をなすと、彼の確かな芸の尊称となった。咸豊年間、楊寡婦影班の郭老天は、二十数才で喉を傷め、声が出なくなった事から、「招嗓子⁽¹⁷⁾」を創出した。喉をつまんだところ声帯への負担が少なく、高低も自在に、大きな声ができるようになったという。当初誰も真似なかったというが、二十世紀になって、この唱い方をする者が多くなった。

b. 楽亭以外の冀東地区の様子

魏革新『楽亭皮影』は楽亭について述べるものなので楽亭ばかりを紹介するのは理解できるとして、劉鋭華「冀東皮影史探討與論述」も、清代の楽亭の状況を述べた後に「皮影戯は楽亭県で興ったのち、すぐに冀東各地に伝わって、各県の影班は雨後のたけのこのように生じてきた。」とする。やはり清代の楽亭以外の地域の灤州影には注意がゆきとどかない。これは、魏革新・劉鋭華がそれぞれ楽亭・唐山の文芸工作者であり、解放後の楽亭皮影劇団・唐山皮影劇団に残った芸人たちの取材から往時の様子を構成しているからだろう。唐山皮影戯劇団の前身の冀東分区分影社は、撫昌盧臨時政府の元で活動したこともあり、『唐山戯曲資料匯編』第三集に挙げられた芸人の伝記には、楽亭以外で活躍した芸人の情報も比較的多いものの、楽亭の繁栄はやはりそれらを霞ませてしまっていると考える。

劉鋭華「冀東皮影史探討與論述」では、清末、豊潤・撫寧の両県に各々大小二十あまり、青龍県はほとんど全ての村に影班があったというものの、各県の状況につい

ては有名な班を一、二挙げるだけで、玉田県の記述に至っては全くない。劉鋭華は、次に唐山について述べる。

当時、冀東地区は直（呉佩孚）奉（張作霖）の争いのために疲弊し、娯楽どころではなく、影戲は再度都市に逃げ込んだ。当時唐山は工場が林立し、経済が発達し、人口が集まって、最もにぎやかなところであった。「人戲（人間が演じる劇）」が三つあったものの、影戲は土くさくて当初参入の余地はなく、初めての上演は炭坑の脇で炭坑労働者を目当てに九日間演じたというもので、班への謝礼は三十元だったと具体的に伝えられている。これは炭坑で事故が起きないようにという「酬神還願影（神への願掛け）」だったという。

1919年に樂亭県の史康侯影班が張繩武に率いられて唐山老慶仙戲院上演。（劇場上演の先例）

1925年、商人の張恵が張恵影班開設。名手を招き、後に齊懷・周文友・張茂蘭なども参加。

1927年、張繩武、苗幼芝が劇場で上演、影戲が定着する。

さらにいくつか影班が増え、劇場での上演が盛んになっていった。唐山では多くの唱腔（節回し）の改革が行われ、二簧や民間小調なども採り入れられた。

即ち、唐山で影戲が初めて上演されたのは1919年で、二十年代半ばにようやく定着したことになる。こうして、劉鋭華は、二十世紀には灤州影がおおよそ次の三つの流派を形成することになったとする。

- (1) 東派：昌黎・灤県・樂亭地区／樂亭方言／單折子戲（功夫影）が多い。
- (2) 西派：豐潤・玉田・遵化地区／唐山方言／連台本戲が多い。
- (3) 北派：撫寧・盧龍・遷安・青龍／土地の方言で、郷土色が濃厚。

c. 民国時代の灤州影

民国時代の灤州影について、『唐山戲曲資料匯編』第三集には多くの芸人の伝記が採録されている（参考書目参照）。少々長くなるがその中から著名な芸人の経歴を要約し、芸人を取りまく時代の潮流をつかみたい。

- (1) 齊懷（劉鋭華・范福源「影戲名小生，唱腔改革者——齊懷」より抜粋）

1897年河北省樂亭県張庵村の農民家庭に生まれる。幼少時には三年私塾に通ったものの、家庭が貧しくそれ以上の教育は受けられなかった。1906年、十才のとき、樂亭県馬頭營辛莊子趙連城影班で芸を学ぶ。1909年、訓練期間を終えたときに丁度光緒皇帝が崩御し、「国孝」としてすべての娯楽活動が禁

止された。そこで、やむなく長春に赴いて商売を学ぶ。翌年郷里にもどり、樂亭県閻各莊鎮祝莊安美影班で「生」と「小旦」を唱う。1915年十九才から樂亭県劉子賀影班、葛翰林班、柏各莊楊榮久班に参加し、老芸人の指導をうける。当時、著名な影戲芸人は唐山に集結していた。「大」の唱腔を改革して既に名をなしていた王慶第に教えを請うべく唐山に向かうが、当初相手にされず、そのことが齊懷を発奮させた。更に芸に磨きをかけ、二十八才の時に再び唐山の「張恵影班」に、今度は招かれて参加した。丁度王慶第もそこにいて、奇しくも観客の最良を争うことになり、負けた王慶第は班を去り、齊懷も過労から左眼を失明した。そののち張恵影班が「小旦」の革新派周文友を招いたため「小旦」の席を譲った齊懷は、「小生」の改革を行う。唐山の観客の厳しい評価に鍛えられ、改革成った齊懷の唱腔は、やがて冀東各地に広まることになった。1931年三十五才のとき、樂亭にもどって孫兆祥影班に参加して一年、右眼も失明する。昼は影巻を読んでもらい、夜は上演活動をする形で活動した。1935年、アメリカの「勝利」レコード会社に請われ、上海でいくつかの演目の録音をする。1944年、四十八才、彼の芸術が頂点を迎えたとき、今度は声を傷める。少し休んでから続けろと勧める周囲に対し「齊懷の声のよかったときの様子を覚えてもらい、悪い印象は残したくない」と郷里にもどる。1946年、樂亭県が「齊懷影社」を作り、郷里で司鼓として後身の指導にあたった。

- (2) 孫品卿（劉瑞符「樂亭県著名皮影芸人孫品卿」）

本名孫世榮、1911年樂亭県于家寨郷將軍屯村に生まれ、後に毛莊郷龍河村に移る。家は貧しく、父親は焼餅や駄菓子を売って生計をたてていた。私塾に二年通ったのち、十二才から働きにでていたが、十五才のときに樂亭県徐各莊王建邦皮影班にはいり艾建章に師事する。研修の三年を終わると班は彼を引きとめ、「小旦」を担当するようになる。1938年樂亭県に洪水があり、郷里では活動できなくなると、東北の招きで長春に赴き、1950年までハルピン、瀋陽、四平などで活動を行い、「勝利」レコード会社で録音を行う。1950年樂亭にもどり、「齊懷影社」の後進「人民影社」で班長を務める。

- (3) 張茂蘭（張瑞奇・孟昭林整理「我的皮影藝術生涯：張茂蘭口述」）

光緒二十三（1897）年河北省玉田県小定府莊生まれ。ものごころついたときには周囲にたくさんの影班があり、追いかけていって聴いた。父は嫌がったが、影戲好きは止められず、二十才（1917年）で村の業余班（農業の合間に活動する班）に参加した。二十三才（1920年）の時、刃連奎を追いかけて張官屯に見に行ってスカウトされ、そののち張恵影班に入る。三十（1927年）才から唐山の斌楽茶園（小山天楽戲曲院のうしろ）の影班に参加する。そこは玉田

出身の張恵の経営で、当時二状元（二人のトップスター）齊懷、趙益三を招いていた。二状元が、「唱はよいが白が玉田なまりでは通用しない」とアドバイスしてくれたので努力して直した。齊懷が病気のときに替わりに真似て歌ったところ、人気でた。レコードを出すなら上手い人を選ぶ。1935年、当時皆が思いつくのは瀋陽の紫凌洲茶園で「髯」を唱っていた張繩武である。天津の昆倉会社が人をやって瀋陽から張繩武と、もう一人「小生」を唱う張占科を招き、唐山を通過して天津に向かうときに自分（張茂蘭）を加えた。天津でレコーディングのあと、瀋陽で唱った。紫凌洲茶園は百人からの客が入り、昌黎県の馬占鰲という当時の班主は、故郷でも瀋陽でも儲けていて（昌黎では乾利堂）、名手を招くためなら七百八百の「押班銭（契約金）」はなんでもなかった。当時有名だった曹輔權⁽¹⁹⁾を招くときには千二百元出した。毎日一出し物を唱うだけで、六十元にはなった。茶園に十五元ほど渡せば、各人が四、五元はもらえた。瀋陽には百代・榮利・寶利公司といったレコード会社があり、1935年三月に十八日間、寶利会社が我々を日本に招いた。寶利会社の伍田晴太郎とともに下関から大阪へ。名古屋で『大登殿』『緑珠墜樓』、東京で『鞭打蘆花』『張彦観画』『天河配』を録音。影班に千元以上、自分と張繩武には各々三千元くれた。七七事変の後、瀋陽を去り、昌黎県齊炳勛影班子などで唱っていたが、上演があったりなかったりなので1938年から1944年までまた唐山に行った。唐山の華樂茶園で唱っていたとき、解放区の遷西県に冀東軍分区影社（後の唐山皮影劇団）ができて、故郷の玉田に人をよこして自分を待っているという。そこで解放区に身を投じた。このときに「大煙（アヘン）」をやめなかったら、あんなに儲けた金を使いきただけでなく、命もなかっただろう。冀東軍分区影社は、「新長城影社」ともいい、多いときには二十数人のメンバーがいた。抗日戦争と解放戦争の宣伝活動のため『白毛女』『血泪仇』といった新影が大部分で、伝統影は『木蘭從軍』『王佐断臂』『保龍山』などを演じた。活動範囲は広く、西は薊県、東は盧龍、北は遵化、遷安、遷西、南は豊南、玉田に行った。敵の攻撃に備えて銃をもち、部隊の援護のもと占領区にも行った。1959年、唐山戯校が出来、京劇・評劇・河北梆子・唐劇の四部門を設けた。唐劇というのは皮影戯を人戯にしようというものだ。そのとき六十三才になっていたが、よろこんで指導を引きうけた。唐劇の学生は第一期男五十名女三十名だった。1961年、他の三班は劇団と合併し、唐劇班は河北戯校唐劇科になった。『白蛇伝』『乾坤帯』『二度梅』など他を教えた。1966年文化大革命の影響をうけたが、その後、特に第十一届三中全会のあとよくなり、唐劇という新しい芸術は花開いた。芸を求める青年達に喜んで伝えていこう。

まず、芸人自身は農村の出身で貧しく、子供の頃から影戯にかなり親しんでいる。もしくはかなりのマニアである。(1)(2)が楽亭の出身で(3)は玉田であることに若干の注意が必要だが、それぞれ当初は村の業余班に参加しているし、名家に召抱えられた專業影班のほかにかかなりの裾野の広がりが見られる。芸風成った後、三十年代には(1)(3)は唐山に、(2)(3)は瀋陽に赴いて活動し、瀋陽はかなり景気がよかったことがわかる。名手となれば、天津や上海、日本にまで赴いてレコーディングが行われた⁽²⁰⁾。偽満（旧満州国）の成立と日本軍の侵攻が、複雑な要素として働いているといえよう。日本が去った後は国共内戦の激戦地となる。遷西県には八路軍の根拠地ができ、共産党宣伝活動のために影戯が用いられる。他の芸人の伝記をみると、国民党に拉致されて宣伝上演を強要され、節を曲げずに逃げ帰った、というものもある。遷西の冀東軍分区影社は解放後、現在の唐山皮影団となった。そして、先の劉論文にもあるように、唐山は新興都市で、解放後は冀東地区全域が「唐山地区」として一つの文化圏と見なされるようになる。この時期の主要な芸人の調査報告には、おおむね上記に述べたことが反映されている。そこで、ひとつ気付くことがある。

北京が出てこないのである。

当然のことながら、瀋陽に行くよりも北京のほうがよほど近い。(3)張茂蘭の故郷玉田県は、楽亭から唐山を超えて更に北京よりである。しかし、上記資料⁽²¹⁾に載せる芸人は、天津に行く機会があっても一人として北京に赴くものがいない。この点については、後述したい。

抗日と国統区のゲリラ上映を行っていた「新長城影社」即ち冀東軍分区影社は解放後唐山に移り、冀東地区各県は公営の「影社」と培訓班（子弟養成機関）を作る。これに前後して各「影社」では従来の八寸（二十五センチメートルほど）から一尺二寸（四十センチメートルほど）の大きさに人形を改め、影幕や舞台設定も大きくし、灯火・音響なども次々と改革した。現在では農村の業余劇団もこれに習っている。

3. 二〇〇〇年代初頭の上演状況

滦州影系調査にあたり、四川大学江玉祥教授より遼寧省蓋州の現地研究者張永夫氏をご紹介いただいた。2001年夏の調査の最後に、武漢から大連経由で蓋州を訪ね、上演をみたあと東北ならびに冀東の様子をうかがって、楽亭皮影劇団、唐山皮影劇団を調査した。2001年冬、楽亭大鼓の研究で知られる大阪音楽大学の井口淳子教授の招きで滦南県の文芸工作者張建国氏が来日、翌2002年夏、今度は張氏のご紹介で滦南県の王寶環氏を訪ね、王氏の紹介で遷安県で上演中の葉金蘭影班を調査するにいたった。そのとき、旧知の楽亭皮影劇団団長郭釗氏と連絡を取り、再び上演をみる事ができた。

それぞれの調査に至った経緯や日程・交通手段などもありまぜて報告したい。各地の影戯の現状を把握するために有効である。

a. 唐山皮影劇団

冀東分区十二団政治部による抗日影社として、李云亭・張子祥ほか二十二名により1946年に発足した。遷安、盧龍、撫寧地域が中心である。1954年、高榮傑影班が関外よりもどると、高価な影箱を寄付して参加、1955年、新長城影社が合併して、唐山専区実験皮影社となり、二手にわかれて農村で上演、資金を稼ぐ。当時は『五鋒會』『二度梅』などの伝統演目を演じた。1956年改革に着手、編劇・美術工・電気工・彫刻など専門化し、影人を高さ七寸から一尺二寸に改革、後には二尺までになった。音楽も、一人でいくつもの打楽器をかねるのではなく、一人ひとつとし、四弦中心だった弦楽器に楊琴・二胡・琵琶・バイオリンなども加え、演目にも電灯に合う神話故事や童話劇などを取り入れた。1959年に唐山市天光影社と合併。六十年代には反右派闘争の影響をうけ、1969年には全員が炭鉱労働にまわされる。1970年に一部の班員が市内にもどり、『紅灯記』などの様板戲を作って演じる。文化大革命後は全国の影戲劇団の中でも代表的な機関となり、多数の賞を受賞、海外上演の機会も多い。(以上劉銳華「唐山市皮影劇団史」)

筆者は2001年に訪問した。唐山市建華西道八号、五階建てほどのビル二つをほとんど全て占める大きな「単位(職場)」であり、演者四十六名・人事管理員や会計などの職員六名を擁する大所帯である。唐山市文化局が監督し、人件費、経費、新作製作のため、唐山市より毎年五十八万元の補助をうけているという。公演の際には最小十名が必要で、地区の小中学校や工場慰問を行うが、最近では国外からの遠征依頼が多く、ほとんど専ら国外の需要にこたえている状態だという。日本にはすでに七回来日しており、2001年にも東京などで動物戯や伝統戯の一部を演じた。

b. 楽亭皮影劇団

1946年、楽亭県政府が齊懷を講師として招き、「齊懷影社」として発足。1947年国民党の進攻で一時活動を停止するも、1948年県委の批准で復活する。1950年、孫品卿入社、1952年、王玉洪が入社し、影人を八寸から一尺二寸にする改革を行う。1954年、楽亭県大衆影社と合併、河北省文化庁によって專業文化団体に批准され、芸人を都市戸籍とし、給料制にするなどの体制改革を行った。このころ孫品卿を団長に活動は充実し、楽亭県を中心に活動、農繁期には東北地方の各都市にも遠征した。1963年には北京で上演、郭沫若に絶賛された。1968年、文化大革命のために解散するが、1973年より一部活動を回復、様板戲を演じる。発足以来、培訓班で多くの青年を育ててきた。(以上魏革新「楽亭県皮影劇団」)

楽亭は、筆者が冀東地区で最初に訪れた県である。楽亭地区では大鼓のほか、「皮影戯」も有名であり、かつ現存することは井口教授からうかがっていた。加えて、四川で江教授に歴史上の基本的な問題と唐山皮影劇団の位置について聴き、遼寧省蓋州では張氏からも資料提供をうけたが、それでも具体的な当ては無い。現地でも現在

どんな人がどれだけ上演活動をしているのかわからないまま楽亭県域にのりこみ、楽亭賓館に宿をとって、電話攻勢をしかけたところ、運良くその日の上演場所をみつめることができた。政府機関に常設の連絡場所はなく、一年中冀東地区を上演して廻っているの、事実上団長の郭釗氏を捕まえるより連絡の方法はないという⁽²²⁾。

その日の上演場所である遷安市柳河峪は、小高い山に面した小さな村で、その小学校の校庭にやぐらを組んでもう十日になるという。六、七メートルはあろうかという鉄骨のやぐらを三メートルほど鉄製のはしごで登ると、五メートル四方の舞台裏になる。客席側に高さ二メートル幅五メートルほどのスクリーンが張ってある。光源は長い蛍光灯をいくつも並べた長方形のものをスクリーンにむけて斜めにむけてある。上演準備が始まると、まずは楽器担当が集まって音合わせをし、そのうちに唱と操縦(人形を操ること)担当がつづら(影戯箱)をあけて人形の体に頭を挿し、やぐらに縦横に渡してある鉄線に懸け始めた。

人形は一尺二寸約四十センチメートルほどの高さで、全て皮を用いている。背景として配置する道具は、プラスチックに塗料で鳳凰や牡丹の鉢、窓枠と外の風景などを書いたものも用いていた。灤州影の特徴である影巻(脚本)は、スクリーン裏側の腰の高さの台に、小さな木製の見台で斜めにたてかけ、ページがめくれぬよう金棒で押さえて置いている。楽器には、京鼓・銅鑼・竹板といった打楽器のほか、二胡・四胡・楊琴まで用い、豊富である。

照明担当(灯光)が置かれるほか、声も舞台部分で拾ってスピーカーから大音響で流していた。操縦は主に二名であるが、楽隊にしても操縦⁽²³⁾にしても頻繁に入れ替わり、打楽器は一人でこなしていた。出演者を出身地とともに示し、翌2002年の調査時に入れ替わっていたメンバーを右に添える。

『松棚會』

(松棚會：王莽篡奪に関する故事)(翌年、楽亭県域の上演『乾坤帶』)

(操縦)高煥才(47) 楽亭県姜各莊鎮後梁莊村

李青春(45) 青龍県 孫品清：楽亭県前庵河村

(唱) 梁素芝(36) 楽亭県会里郷後黒村

常淑娜(25) 楽亭県湯家河鎮羅莊村

黄寶燕(30) 遼寧省凌原 邱連賀：灤南県邱莊子村

李志懷(50) 青龍県 劉作信：楽亭県新寨村

金兆元(50) 青龍県

閻興華(47) 楽亭県西凡坨村

(楽隊)郭釗(47) 楽亭県城関鎮高甸村

周其昌(58) 楽亭県城関肖園村

李樹廣(32) 遼寧省凌原 閻少紀：楽亭県会里村

(灯光)高光亭(47) 楽亭県姜各莊鎮大莊村(編輯)李祝三：楽亭県董莊村

一夜あけて、メンバーに話をうかがったところ、表にもあるとおり、遼寧省の凌原や青龍県からもメンバーを受け入れ、研修を兼ねているということだった。翌年楽亭県域で上演に出会ったときには、郭団長が「去年と違う人だけでいいだろ」と右に示した人物名を書き出して

くれた。

楽亭影の正当な継承団体として、現在も活発な活動を行っていることが、2001年と2002年の訪問によってもわかった。

c. 従来の民間型組織—葉金蘭班

2002年の調査では、灤南県の現地研究者張建国氏の紹介で灤南県の王寶環氏を訪ね、そこで遷安市の沙河驛で影戲の連続公演が行われていることを耳にした。地名だけを頼りに現地に赴くと、村民委員会の広場に楽亭皮影劇団が用いるような鉄骨のやぐらが組み立てられ、「承德市藝園春皮影団」と横断幕がかかっていた。

晩の上演を待ち、取材を依頼したところ、若い女性老板(班長)葉金蘭以下、メンバーは皆快く応じてくれた。大きなスピーカー、蛍光灯を用いた照明、舞台裏の様子、用いる人形・楽器などは現在の楽亭皮影劇団とほぼ同じであるが、影幕の両袖には影人の机・椅子・衝立といった「道具」が何枚も重ねて黒い袖を形成していた。楽亭皮影劇団ではプラスチックに絵を描いた板が置いてあった位置である。翌日、老板で遷安出身の葉金蘭(39)を取材した。この班は数年前から葉金蘭が組織した專業影班で、正月初六から十一月まで、遷安市内各地を数日から十日前後の公演を行いながら渡り歩いている。沙河驛では六日間の予定である。上演演目は班側で決めるという。「台板(舞台道具)」と脚本は承德の新農源公司の才東洋という事業主から借りている。この人物は影戲の愛好者で、影巻や舞台道具を所有するが、自らは歌えない。承德にも芸人はたくさんいるはずだが、様子はよくわからないという。

今年のメンバーは今年結成し、凌源、楽亭など芸人仲間の「联系」により集めることができる。

張申 (55) 生
陳爲寬 (57) 旦
葉金蘭 (39) 旦
周景宏 (34) 旦
于得禮 (46) 老生上線
仁爲民 (41) 老生花臉
楊書平 (54) 花臉下線
徐金和 (51) 四胡
董寶翠 (48) 楊琴
賈向民 (52) 司鼓

出身地は、遷安県出身が葉も含めて四名、他遷西三、灤南二、凌源一名である。

このメンバーで上演できる演目は、前日みた「降虎陣」のほか、才から借りた影巻のある以下のものである。

『劉仁掃北』十冊十日程度

(一晚二時間なら十日、三時間なら八日)

『昭君出塞』十冊十日

『五鋒會』二十冊二十五日

『長寿山』十冊

葉金蘭自身は、遷安市の文化館で影戲を学んだ。1970年当時毎年四名程度の弟子がおり毎年入れ替わったとい

う。講師は黃詳(男、現在70)という小(女性役)を唱う芸人で、当時は上演活動もしていた。現在上演をやめて十年になる。遷安地区で有名な芸人としては趙云庭を知っている。生きていれば九十歳以上である。遷安には現在葉金蘭を含めて四名の班主がいるが、活動しているとは限らない。おそらく活動していないだろうということだった。四名を挙げる。

葉金蘭(女) 上莊郷高各莊

白利国 市から三里

賈千 丁官營郷大賈莊村

崔学明 大崔莊鎮小崔莊村

唐山・楽亭と、国営劇団を訪ねたが、ここに至って、民間の組織に出会うことができた。井口1992には1988年の「唐海二場皮影社」という、唐海・唐山・灤南から芸人を寄せ集めた業余班が紹介されている。さらに十年を経て、遷安県でたったの四班とは寂しいが、冀東地区にこのような班はまだ若干活動しているであろう。そして、この組織方法こそが従来自然に分布していた灤州影であると考えられる。

4. 九十年代の地方志より

清代から民国初年にかけて、名家のお抱え影班が名を競い、「十年一腔」とばかりに次々に唱腔の改革が成された楽亭影は、トップスターを輩出する中心地として灤州影系各地の憧れの地であったことは想像に難くない。影戲版「戲迷(芝居狂い)」がその芸を支え、語り継ぎ、現地には音楽・唱腔の研究が残された。民国時期には、日本による占領や列強の進出により、瀋陽や唐山が奇形的に発達し、影戲のトップスター達は続々と引き抜かれて華やかな舞台が用意され、レコードに録音されて、全国に紹介されるようになった。

しかし、こうした動きは、悠久の時の流れの中でじっくりと熟成されてきたであろう影戲の芸にとって、どのように位置づけられるのであろうか。「十年一腔」のペースで革新的な唱腔が生み出されれば、「十年一腔」のペースで以前のものも失われることになる。民国時代にレコードに記録されたトップスター達の唱腔は、灤州影系が数百年に渡って受け継いできた芸を果たしてどれだけ再現していたのか、これは若干注意が必要な問題だろう。

灤州影系の影人の生や旦の造型は、独特の特徴をもつ。これを用いる影戲は、冀東地区のみならず遼寧省に広がって蓋州影、遼南影があるほか、長白山一帯の満州族の間にも同様の影戲が分布する。清代以降の冀東地区のみならず、地域も、時期も、さらに視野を広げて考察すべきだろう。

しかし、前にも述べたように「皆が身近に知っていても、きちんと把握する気にはならない、そんな民間の芸能」である。民国以前に地方志など文人のものとする資料に「芸」として尊重されて記録されることは極めて稀である。そこで、九十年代の各地地方志より、これまでの各「地方志の筆法」を想像しながら手がかりを求めたい。

a. 民間の陋習

山海関を超え、渤海湾岸を瀋陽方面に進む途上の興城
県志1990には、第二十二篇文化芸術第五節曲芸に、大鼓・
評書とならんで皮影戲（俗称驢皮影）の紹介がある。解
放前、解放後、文化大革命後に分けて述べ、解放前につ
いては、演者は零細な芸人や家族で構成する曲芸班であ
ると、大鼓も評書もいっしょくたに曲芸として述べる。
解放後について紹介する曲芸ジャンル名は若干増え、皮
影もかろうじて独立して紹介されているが、「大部分は
町の茶社で上演され、農閑期には農村にも行っている」
とやはり大雑把な表現である。実は第二十四篇第六節占
候には、「祈雨」「看風水」「占卜・算卦」「巫医」などが
陋習として取り上げられ、そのうちの「祈雨」の末尾に
「雨を祈祷した日から七日以内に雨がふれば、民間や商
店がお金をだしあつて皮影戲や人戲をもつて「還願」し、
神明に感謝する。建国後、この習俗は既になくなった⁽²⁷⁾」
とする。

皮影戲を「還願」に用いる例は黒龍江省の安達県志1992
にもみられる。

解放前には、皮影戲は“会影”と“願影”の二種に
分けられて演じられた。“会影”は資金を集めて影
戲上演を設け、豊作と神祭りに用いた。“願影”は
施主がお金を出して影戲上演を設け、「還願」する
ものである。安達県には曲影匠屯（現在は中本郷の
管轄）があった。即ちその曲という姓の芸人が影
戲の上演で有名になったことからついた名である。
解放後、任民鎮邵影匠と県の工商聯盟の二つの皮影
隊が、全县各地で上演を行った。以後、現代文化事
業の繁栄と発展、特に映画の出現により、皮影戲は
既にだれも上演することはなくなった。⁽²⁸⁾

安達県は黒龍江省のハルピンから西北に少しいったと
ころで、樂亭影が流行って芸人が東北三省に遠征したと
しても、このように民間の習俗まで容易に入り込むとは
考えにくい。⁽²⁹⁾人口構成は清代から漢族が多いところであ
るが、「曲影匠屯」という地名といい、かなりの歴史の
古さを予想させる。これくらいに謎めいてくると、地方
志はこうした記載を行うようになる。しかし、民間の陋
習と捉えている間は、知識人が好んで著録することは稀
である。したがって、九十年代の県志になって初めてこ
うした「かつての陋習」がぼつりぼつりと記載されるよ
うになったと考えられる。

b. 祭祀としての皮影

“会影”と“願影”の記載は他にもみられる。盧龍県
志1994にも“会影”と“願影”を挙げ、“願影”は結婚・
葬式・祝寿・跡継ぎの誕生・病氣平癒祈願に行ったとす
る。昌黎県志1994では、“会影”は節季や廟会の折りに
群衆が資金を出し合い通常四日間、“願影”は“祝願影”
といて趣旨は同様で、三日の上演が普通であるとい
う。⁽³⁰⁾遼寧省凌源県志1995でも同様に“会影”四日を紹

介し、“願影”については「無事な状態で上演を招くの
を“太平影”、事情があつて上演を頼むのを“平安影”
や“願心影”⁽³¹⁾といい三日で一席である。」とする。

群衆が集まって、幾夜も何か願い事をしている。為政
者にとっては陋習であり、脅威であろう。

清光緒五（1879）年、昌黎県靖安郷蔡各莊の張老慶影
社は、清朝の統治者から「白蓮教」の「懸灯匪」とみな
され、紙の人紙の馬で「興妖造反（妖怪を興し造反する）」
とされて捕まり、虐殺された。⁽³²⁾灤県志1993では「これは、
“嘉慶四年五月内奉⁽³³⁾上諭（中略）各省督撫司道署内、俱
不許私養戲班，以肅官箴而維風化。（中略）政考卷十三、
未見）”によるもので、永平知府游知開も影戲の上演を
禁じた。」とするが、樂亭県では先に述べたように崔家
影班の崔右文が撤回させたというエピソードにつながる。
游知開は光緒永平府志を編纂した人物で、本当にそ
のような事実があったかどうか、まだ伝を確認できてい
ない。しかし、同じ事件の受け止め方に、樂亭・灤県方
面と昌黎方面で違いがあったことが、民間にも影響し
た、もしくは民間の認識がエピソードの伝わり方に影響
したことが考えられる。

c. 灤州影系の分布と変遷

“願影”などの記載がみられたのは、遼寧省に近い盧
龍・昌黎、そして遼寧省の凌源・興隆、さらには黒龍江
省の安達であったが、陋習と見做されているからには九
十年代の地方志にも記載されない場合もある。芸人に
とっても“下九流”や“懸灯匪”などと言われるよりは、
高尚な芸として認められるほうが気分よからう。清代に
一斉を風靡した樂亭、灤州影の名をもつ灤県・灤南県で
は、仮にそうした風習が行われていても、記録には反映
しないと考える。それに対し、抗日戦争、解放戦争、文
化大革命と、何度も困難な時期を経ながらも、それでも
現れる幾多の農村業余班。これこそが数百年の灤州影系
の命脈を細く、しかし確かに受け継ぐものと考ええる。も
ちろん、樂亭や唐山、瀋陽などの繁栄は唱腔や芸そのも
のにも影響したであろうし、解放後の政府の指導は影卷
の内容を変え、上演方法や、冀東地区全域の影人の大き
さを変えるに至った。こうした視点から、樂亭影の繁栄
の影に隠れた清末以来の農村影班の分布をみてみたい。

清末からの各県域内影班数

(九十年代県志による。「県営」は、県営皮影社が設立された時期)

	清末	1910	1930	抗日解放	建国後	1957以降	1979	1983	1986	1992	着眼点
遵化県志1990	多			県営		32			18		冀東西部 (西派)
玉田県志1993	多	各村			38	41	県営				
唐海県志1997	3			3						1	楽亭影響圏 (東派)
灤県志1993	(多)				72			30	11		
灤南県志1997	(多)	12				9		6			冀東東部原型域 (北派)
昌黎県志1992	多	11	9	4				減			
盧龍県志1994	多			県営							承德新興地域
撫寧県志1990	多	10			10	28	9				
青龍県志1997	2		200			県営	21			減	承德新興地域
寛城県志1990	外来	2	11	7	15		63	県営			
承德県志1998	外来				8	54			56		
平泉県志	外来		10	12	70	県営			47	22	
凌源県志1995	多				県営	121		40			要調査

右の「着眼点」に示したのは、九十年代地方志により得た、冀東地区灤州影系の変遷を考えるためのグループである。先の劉鋭華氏による三つの「流派」を()で示した。

(1)冀東東部原型域(北派)

“願影”などの民俗的色彩の強い影戯が報告された昌黎や盧龍は、そもそも灤県や楽亭とも近い。ところが、名家のお抱え班で楽亭があまりに名を馳せたために、楽亭地区では清末から民国にかけて独自の芸として影戯が発達するに至った。一方で、陋習とされ、“懸灯匪”の悲劇をみた昌黎・盧龍地域では、従来の灤州影がほそぼそと行われていたであろう。したがって、県を超えて活躍する芸人の間では、楽亭・灤南(當時は灤県)の影班は「はやりの班」であったが、昌黎・盧龍・遷安あたりの影班は、農村に好まれる従来の芸を広めていたと推測する。民国時代に桁違いの収益を上げていたとして、しばしば楽亭や唐山の芸人の口にもものぼる昌黎乾利堂は、この北派を母体として、従来からの影戯の需要を吸収したに違いない。しかし、昌黎乾利堂でも楽亭の影響をうけ、「西皮・二黄」をとり入れた李秀が名をなし、故郷昌黎の県志にも特筆されるようになる。このように、芸で注目され、レコードに録音されたような芸は、既に本来の特徴を失い始めていると言えるかもしれない。

加えて、遷安・昌黎・盧龍・撫寧は、遷盧撫昌連合県政府ができ、抗日戦争・解放戦争の影響を強くうけた。影戯の上演が制限されただけなら、数十年の空白の後に復活することもあるが、芸そのものが抗日宣伝・革命宣伝のために大きく路線変更し、従来の民俗的色彩は革命の栄光のもとに根底から消え去ったのではないかと想像する。それに対し、承德新興地域として示した承德・平泉・寛城、そして青龍は、もともと影班が存在しないところに、清の光緒年間にいくつかの影班が遷西や昌黎方面から上演にやってきた、という記載から始まり、青龍

では偽満(旧満州)統治下に二百以上もの影班が栄える。万里の長城を境に、清末までは見事に分けられていたものが、民国の動乱で冀東東部原型域(北派)の芸が関外に移植されたと考えられる。そして、承德新興地域とした承德・平泉では、八、九十年代になっても数多くの影班が活動している。この地区を丁寧調べることで、従来の灤州影系の唱腔に出会うことができるかもしれない。

ただし、そこから更に山脈を超えた凌源については、更なる調査が必要である。従来の冀東地区北派の遷安や盧龍・昌黎との間には、清末には影班の存在しなかった青龍・寛城・平泉などが間に存在する。2001年、灤州影系は冀東地区から東北三省まで芸人の交流があり、凌源の芸人は先に示した楽亭皮影劇団に参加することもあるし、遼寧の蓋州影に参加することもある。すぐ近くの興隆県志は影戯について冷淡な筆致であったが、凌源県志1995では八十年代に四十以上の影班を記録し「上演範囲はすでに県境を超え、遼西、冀北十余県に及び、本県は“皮影之郷”と賞される」と肯定的である。

(2)冀東西部(西派)

劉鋭華が西派とした冀東西部の玉田・遵化にも、従来農村の業余班が多いことは、先に張茂蘭の伝でも紹介した。劉鋭華は西派は唐山方言だとするが、唐山にでてきた張茂蘭は、玉田方言を改めさせられたとある。玉田県志1993によれば玉田は清末から民国にかけて影班が全県にあまねく存在し、七七事変(1937年)までがピークであったというが、わかるのは数の多さのみで、芸についての資料は現在まで入手していない。

結

民国時代、天津や瀋陽・上海などでレコード録音し、全国に紹介された「楽亭影」「灤州影」の名手たちは、清末の楽亭影の盛行、唐山という新興都市の出現、そし

て偽満（旧満州）や抗日戦争などの影響が様々な形で作用して、その唱腔を記録にとどめることになった。冀東地区の灤州影自体は、抗日戦争の激化と解放戦争により打撃をうけ、新中国の指導によって演目の内容も、人形も、舞台も新たな発展を遂げた。そうした華々しい記録の陰で、農村には記録にも記憶にも残らない無数の上演が生まれ、消えて行っただろう。“願影”のような巫術的色彩をもち、封建時代には邪教として、解放後は迷信として肩身の狭い思いをしながらも、数百年の芸を保ってきた力は、民間のこのような需要であったに違いない。楽亭の四大影班の活躍はたかだか十九世紀半ばのことである。それを生み出した素地は、やはり“願影”をもつ民間の灤州影であっただろう。本稿で冀東東部原型域とした盧龍は、明代には永平府が置かれ、隣の灤県・灤南県とともに冀東地区の従来の中心地である。それに対し、明の永楽年間には江南の富戸が移植され、清初には満州八旗の有力者が移住した楽亭は、土臭い風習よりは「芸」の妙を好む素地があったのかもしれない。

印南1944は、昭和十三（1938）年当時北京には数えるほどしか影班がなかったとし、Wimsattの文「人形遣ひ李氏との對話」を往時の芸を推測する逸話として翻訳・転載する。そこには、「五十年前、即ち影絵芝居が貴族や王室により手厚い保護を受けてゐた清朝時代に、父は非常に多くの弟子を持つてゐました。」とある。北京城内にそうした需要があったことがわかる。しかし、楽亭の伝説的芸人をはじめとして、本稿で調べた清代から民国時代までの芸人のエピソードには、名を成したのち北京で活動した者が一人としていなかった。澤田瑞穂教授は昭和十六（1941）年ころ、北京の東四牌樓でひとつの影班の最後に立ち会った。その芸の繊細さについては、澤田1954に詳しい。そして、東城派最後の班である、その「灤州影戲 勝友軒」の芸人達の故郷は灤県だという。楽亭影繁栄以前、もしくは楽亭影以外の灤州影が、北京城内に多く進出したことが考えられる。

万里の長城を越えた関外の青龍満族自治県や、現在の承德市に属する寛城満族自治県・平泉県では、光緒年間に昌黎あたりから初めて影班が来たと県志に記載されているが、承德新興地域と名づけたこれらの地域では、八十年代後半から九十年代に入っても多くの業余班が活動している。これらの地域での現地調査により、冀東東部原型域即ち灤州影系の古い姿を見ることができるかもしれない。

灤州影系の分布地区は、冀東地区のみならず北京を含めて東北三省に及ぶ。東北には遼寧省に蓋州影・遼南影が確認されるほか、黒龍江省にまでかつての灤州影の痕跡がみられる。こうした問題について、本来歴史の視点からの考察を準備していたが、あまりに長く煩雑になることから本稿では冀東地区部分のみを先に示すことにした。

注(1) 灤州影系という分類名は、江玉祥1992による。中国影戲に関する共同研究の報告は稲葉2003にすでに示

した。本稿は、その冀東部分を中心とした考察である。

- (2) この地区では影戲のことを「驢皮影」ということから江教授は「皮影戲」を多用するが、現地では「皮影戲」と言うと同じにくいことが多い。
- (3) 民国時代、本稿で扱う冀東影戲の芸人は、東北三省各地の劇場の招きで上演活動を行った。一方、東北三省の満州族の間には、満州語を用い人形の特徴も似通った影戲が存在する（『東北民族民間美術總集』1995）。今後は歌詞・音楽・パフォーマンスに踏み込んだ比較研究がなされるべきであろう。
- (4) 澤田1954に、昭和十六（1941）年当時の北京東城派最後の様子が述べられている。北京城内の様子については、稿を改めて考察したい。
- (5) 玉田県志1993、遵化県志1990「集市貿易」。玉田は北京にも近いが、往時の水上交通を考えれば天津に抜けるほうが自然であるし、北京との間には廊坊・香河などの回族地区が存在する。
- (6) 楽亭県志1994。魏革新「楽亭影戲起源考証與論述」P 46。
- (7) 影戲では各劇団が人形を入れる箱を持つため、劇団を「箱」と言うことが多い。
- (8) 王大勇「福影調査記」（『唐山戲曲資料匯編』第三集）。江玉祥1991、P215。千田2001、P85。その人形の特徴と、「祖師爺」が観音菩薩であることから秦晋影系が当地にもともと分布していたとする。
- (9) 王信威『遼南皮影音楽』春風文艺出版社1989。
- (10) 灤州影系の影戲について、その芸と唱腔については多くの先行研究がある。また、楽亭影・蓋州影について、現在も上演をみることができ、現在影班の協力を得て資料の記録保存に取り組んでいる。民国時代に録音されたレコードも豊富である。唱腔の研究は課題であるが、本稿ではまず全ての基礎となる分布の把握から行いたい。
- (11) 顧頤剛1934、佟晶心1934、吳曉鈴1936、金受申1938等。これより早く、李家瑞1933にも「燈影戲」の項目で紹介されている。
- (12) 灤州影系の脚本もしくは台詞を活字にしたとみられる『燕影劇』という洋装鉛印本の刊行者も、山東兗州府天主教会である。
- (13) 顧頤剛論文に紹介される李脱塵は、玉田出身の「美以美会」の伝教士で、河北各地を巡ったという。澤田1954に紹介される東四牌樓の「灤州影戲 勝友軒」の董玉峰という芸人は、カソリック信者で、昼間は電車通りに面する天主教の福音堂を手伝っていた。(12)の書といい、北京東城派は天主教の活動との関係も予想される。
- (14) 魏革新「楽亭影戲紀源考証與論述」など、『唐山戲曲資料匯編』第三集所収の他の報告も参考にした。参考書目に所収資料を示す。
- (15) このほか、文人の影戲との関わりを示すエピソードとして、道光の拳人高述堯、清末の秀才高霨林などが影卷を編集したとされる。（劉榮徳等1991P18）
- (16) 「投河覓井，打死勿論。」
- (17) 稲葉2003口絵2、1-a。
- (18) 太鼓でリズムをとる司鼓は、劇の進行の指揮者としての役割をもつ。

- (19) 曹輔全とも表記される。「権」「全」同音。
- (20) 多くのレコードが中国全土で発売されたのに伴い、茂記書莊、上海大成書局などによる石印本「影詞」（影卷）が出版された。（澤田1954付記）。印南1944口絵には「繡像漁家樂瓊林晏影詞」が掲載されている。
- (21) 『唐山戯曲資料匯編』第三集。ほか、楽亭影に関する資料全般にみられる傾向である。
- (22) 文化局にといあわせると、文体局の管轄だという。文体局でも当初は「あるにはあるがわからない」という消極的な対応だったが、最後に楽亭皮影劇団団長郭釗氏のポケットベルの番号を教えてくれた。その日は2001年夏の調査の帰国直前で、四川・陝西・山西・河南と巡るうちにビデオカメラは壊れ、河南で購入したカセットテープレコーダの調子も悪く、夜行列車で早朝着いた滎県からミニバスでやっと乗り継い楽亭にたどりついたが、帰国日程も迫っていた。気力がぐんぐん失われていこうとしたそのとき、郭釗氏から折り返しの電話が入った。「今日も上演する、場所は遷安市柳河峪、五時くらいまでに到着すれば迎えに行く。」すぐさま河北省地図冊の遷安市を開いて探す、みつからない。場所をフロントに移して現地の服務員に電話を替ってもらうが、こてこての楽亭方言でやりあってもなかなかわからない。やっと目印の馬蘭莊鎮を聞き出し、交通経路を確認するが、自家班用車で動いているからわからないという。見ると、楽亭県から北に滎県を超えて遷安市はわかるが、そこから目的地までは細かい道が途切れ途切れに示されていて、いくら見てもミニバスの経路が想像できない。しかも、この距離ではすぐ出発しても五時までに着く確証もない。そこで、遷安市に宿泊するつもりで楽亭賓館をチェックアウトし、汽車（バス）駅にむかう。遷安市に直行するバスは無いということなので、滎県行きのミニバスに乗りこみ、出発を待っていると、フロントガラスの内側に置いてある行き先を示すカードの、外に示された方はもちろん滎県であるが、客席から見える裏面に「馬蘭莊」とある。「このバスは馬蘭莊に行くこともあるのか」と聞くと、滎県に着いたら馬蘭莊行きになるのだという。そのバスは、楽亭からさらに東の姜各莊から、楽亭・滎県を経由して馬蘭莊というルートを行往しているのだそうだ。「このルートを取るミニバスは多いのか」と聞くと、楽亭や滎県を中心にさまざまな鎮を行往するミニバスが縦横に走っていて、必ずしも楽亭と馬蘭莊を結ぶわけではない、というよりそうしたルートは二つと同じものがないという。遷安に行ってしまうとそこから馬蘭莊は行きにくいので、滎県と遷安市の境の野鷄坨で遷安行きの道と別れる。一体どこで目的地行きのバスをみつけばよいのか。難しいところだが、結果オーライである。楽亭滎県間七元五角、滎県馬蘭莊間九元であった。馬蘭莊には立派なホテルが二つあった。柳河峪は馬蘭莊から数キロ戻った街道沿いにあった。夜の活動なので、団長の郭釗氏が村の一家に筆者の世話を頼み、上演ではその家の子供達が供をしてくれた。
- (23) ビデオもテープも回してはみたが、残念ながらテープに若干の音が入っていたのみである。機会があれば舞台写真とともに再構成してみたい。一週間以上の海外調査では、予備の機材が必須であるという教訓である。
- (24) 楽亭培訓班の第一期生、即ち齊懷の弟子である。
- (25) 舞台裏を出て、客席に設置した機材の位置にもどると、しばらくして公安と名乗る若い青年が来て、パスポートの提示を求められた。撮影を止めて即刻ホテルにもどれと言われたが、撮影は研究に用いるものであり、現地研究者の張建国民と同行してきた旨伝えて、何とか上演の最後まで撮影をゆるされた。閉演後は、やはりその青年と、同年代の村の青年たちが、公安のジープに乗ってきて、ホテルまで送ってくれた。聞けば、この地域は抗日戦時期には日本軍に、解放戦争時期には国民党軍によって影戲の上演は制限され、影班も観客も命がけ、闇の中からいきなり銃撃戦になることもあったとのこと。ビデオカメラなど見慣れない機器に、「来たのは日本人らしい」という噂が広まって、老人たちの思い出話から観客の間に「反日」の雰囲気が醸されていたのだそうだ。配慮の至らなさを反省した次第である。
- (26) 劉慶豊『皮影資料』。
- (27) 従祈雨日起、七天内如降雨、民間與店舖捐款唱皮影、唱戲等以還願、感謝神明。建国後此俗已息。
- (28) 解放前、皮影戲分“会影”和“願影”兩種組唱形式：“会影”是集資唱影，用以慶豐收或祭神，“願影”是箇人出錢唱影還願。安達県有曲影匠屯（今中本郷轄），即是当地姓曲的芸人唱影出名而得名。解放後、有任民鎮邵影匠和県工商聯兩箇皮影隊，在全県各地演出。以後，隨着現代文化事業的繁榮與發展，特別電影的出現，皮影戲已無人組織演唱。
- (29) 冀東皮影戲が東北三省に遠征してもてはやされるようになったのは、二十年代以降のことであろう。遷安の厲景陽の伝によれば、1920年代半ばに張繩武とともに奉天に初めて行ったとき、土地の人々は影戲を知らず、市内での上演を許さなかった。しかたなく郊外で三日ほど上演したところ評判を得、それから市内で上演するようになったという。（王大勇「厲景陽」『唐山戯曲資料匯編』第三集）
- (30) 稲葉2003に挙げた河南省南部羅山地区では、長男出生にあたり招いた上演で、家人が見るでもなく、昼日中から延々と上演していた。三夜とせず、原文どおり三日と訳す。
- (31) 「無事招演者称太平影，因事許演者爲平安影，也叫願心影，其期率以三天爲一台。」県志本文ではこの部分を“”で括っており、何かの引用かもしれない。より広く地方志や筆記を調べる必要がある。
- (32) 昌黎県志1992、秦皇島市志第九卷1993。滎州影系の影班が必ずもっている「大下巴」「大師哥」という顎がゆがんで奇怪な形相の人形は、上演の際には「ジョーカー」として様々な役回りをする。（千田2001他）この説明をするとき、芸人たちはきまって次のようなエピソードを口にする。「清代に邪教（白蓮教）を布教する団体として影班が弾圧され、役人の目が厳しかった。特に、影人は生き生きと活動するので、これに魔術を用いて兵隊にしたて、謀反を起こすのではないかと言われた。そこで、影箱に影人をしまおうとその一番上に「大師哥」を乗せ、影人が反乱を

起こさないよう監視させています、と言ったものだ。
(蓋州、王生太)」こうした危惧が灤州影系の芸人の
間に広まったのは、この事件のせいであろう。ただ、
ももとの「大師哥」の役割は他に求めねばなるま
い。

(33) 蓋州影の調査については、稿を改めたい。

(34) ただし、青龍では民国初年に一挙に二百以上の業余
班が活動する。関内昌黎あたりから影班が来たのは
確かにその時期かもしれないが、それ以前に無かつ
たという記載は鵜呑みにできない。

参考書目

『唐山戯曲資料匯編』第三集冀東皮影戲專輯

(唐山市戯曲志編輯部)(刊年不明)

劉銳華 冀東皮影史探討与論述

魏革新 樂亭影戲起源考証与論述

王大勇 福影調査記

王大勇 芸人趙紫陽赴日演出見聞

劉銳華 抗日影社史料

魏革新 早期班社史料

劉銳華 唐山市皮影劇団史

魏革新 樂亭県皮影劇団

徐連傑・王宝善 灤県皮影社

徐連傑・王宝善 豊潤県影社史料

張樹云 玉田県皮影社史

劉曉鐘 遷西県長城皮影社

霍一新 遵化県皮影社

他、幾つかの冀東地区影社資料ならびに著名芸人年譜と以
下の著名芸人伝記：李雲亭、齊永衡、齊懷、高榮傑、
孫品卿、蘇旭、張茂蘭、張繩武、李秀、張占科、苗幼芝、
李紫蘭、曹輔全、康雅亭、厲景陽、王華、韓增、蒙本天、
鄭六、趙紫陽、張老壁、楊德生、聶老春、張兆祥、張承志、
王玉洪、閻紹繼、霍榮華。

顧頡剛1934

灤州影戲『文學』第二卷第六期中華書
局

佟晶心1934

中国影戲考『劇學月刊』三卷第十一期

吳曉鈴1937

金受申1938

印南高一1944

澤田瑞穂1954

魏革新1990

劉慶豊(刊年不明)

劉榮徳・石玉琢1991

井口淳子1992

1999

江玉祥1992

1999

岡崎由美2001

千田大介2001

落合守和2002

落合守和2003

稲葉明子2003

關於「影戲」與「寶卷」及「灤州影戲」
的名稱『歌謡』

灤州影戲『立言画刊』第二期中華書局
『支那の影絵芝居』玄光社

灤州影戲の藝術『跡見学園国語科紀
要』第三号

『樂亭皮影』樂亭文史第五輯(政協樂
亭県委員会文史委員会樂亭県文教局
編)

『皮影資料』黒龍江省芸術研究所

『樂亭影戲音楽概説』人民音楽出版社
影にうたう__中国北方農村の影絵芝居
CDブック全集『地球の音__フィール
ドワーカーによる音の民族誌』第61卷
日本ビクター・ビクター音楽産業(東
京)

『中国北方農村の口承文化__語り物の
書・テキスト・パフォーマンス』風響
社

『中国影戲』四川人民出版社

『中国影戲与民俗』淑馨出版社

『近代中国都市芸能に関する基礎的研
究』平成九一十年年度科学研究費補助金
基盤研究C研究成果報告書

北京西派皮影戲をめぐって『近代中国
都市芸能に関する基礎的研究』平成九
一十年年度科学研究費補助金基盤研究C
研究成果報告書(研究代表者：岡崎由
美)

影戲影詞總目稿(一)『人文学報』331
号 東京都立大学

影戲影詞總目稿(二)『人文学報』341
号 東京都立大学

中国影戲調査報告『演劇研究センター
紀要』I早稲田大学21世紀COEプロ
グラム〈演劇の総合的研究と演劇学の
確立〉

